

■ 巻頭言

慶應義塾ITC年報の発刊によせて



■ 常任理事 真壁 利明

電子メールやインターネットによる空間を超えた即座の情報交換と収集など、我々が日々の生活で享受している情報技術（Information Technology）は、その分野や年齢を問わず「あれば便利」というものから「なくてはならないもの」へと発展し、我々の社会生活の質（QOL）の向上に貢献しています。ほんの20年ほど前までは、コンピュータ資源はとても高価で、一部の専門的な知識・技術をもった人たちだけが独占的に利用するものとして認識されていました。ところが、現在では誰もが当たり前のようにPCやネットワークを利用し、専門知識なしで情報社会の恩恵を受けられるようになってきました。コンピュータネットワークが一般化し広く利用されるようになり、コミュニケーションの中心的なチャネルの選択肢が増え、オンデマンドによる情報入手が可能になるなど、人々のライフスタイルも大きな変化を遂げています。こうしたことを考えると、情報技術の進展は、一種の「パラダイムシフト」を生んでいると言えるかもしれません。

これらの情報技術は、日々発展を続けており、より高度化、複雑化の一途をたどっています。様々な電子機器がネットワークに接続され、いつでもどこからでも情報技術を活用できるユビキタス環境が整いつつあります。情報技術基盤をもとにネットワークを介して高度サービスを受けるクラウドコンピューティングなど、新たな概念、技術、そして用語も生み出されてきます。そして、それらが広く社会に浸透する頃にはすでに時代遅れになってしまう、ということすら起きています。規模の大小はありますが、情報技術の発展に伴う「パラダイムシフト」はとても短いサイクルで起こっており、新しい文明への模索が続いていると言えましょう。

一般社会がそうであるように、教育・研究、医療、学校経営の活動を推進する際にも、ネットワークや、各種のコンピュータソフトウェア、高度な計算処理など、情報基盤とそれを利用したサービスは、なくてはならないものとなっています。義塾におけるこれら諸活動において、情報技術の発展に伴う「パラダイムシフト」の出現に的確に対応していくことはもとより、高等教育・研究機関として、新たなパラダイムを創出するための推進役としての役割も継続して果たしていかなくてはなりません。

インフォメーションテクノロジーセンター（ITC）は、慶應義塾の教育・研究・医療・経営などの日常諸活動を支援するために、情報基盤の整備・構築と各種の情報利用のためのサービスを提供しています。学生や教職員に対して常に最適な情報環境を安定的に、そ

して安全に提供することを活動目標としています。

情報技術の急速な発展と並行して、ITCの活動の範囲や内容も引き続き拡大を続けています。さまざまな電子機器がネットワークに接続されるようになり、これまで以上に管理すべき機器の種類や台数が増加しています。さらに、利用者の要求もより高度化・複雑化してきており、キャンパスのどこからでもいつでもネットワークに接続したり、キャンパスから離れた場所で自分の研究室の環境にアクセスしたいという要望も多く寄せられるようになっています。

こうした要望に対し、単に「利用できる」ことを実現するばかりでなく、当然「安全に」ということも考慮する必要があります。ところが、この「安全な」利用環境を提供することは、実はそう簡単な話ではありません。安全性を高めるためには、ある程度利用上の制約を課すことも必要となります。そうかと言って、安全性を追求し過ぎるあまり、あれもこれもと、様々な制約を課した結果、研究や教育活動にとって使い物にならない情報基盤を構築してしまったのでは、本末転倒の謗りを免れません。常に「利便性」と「安全性」のバランスを意識する必要があります。

昨今の義塾財政厳しき折、様々な活動を行う際には「大学らしい効率」を考慮することが必須事項となっています。全キャンパスのIT技術の統合、さらに効率的な業務や管理コストの削減のためのIT新技術の活用なども実現していく必要があります。

こうしたさまざまな要件がある中で、より良い情報環境を実現するために、最も重要なことは、利用者の視点にたって情報環境をデザインすることであると考えております。ここに用意する「ITC年報」は、義塾の情報環境の現状を表す各種の統計数値を掲載するだけでなく、ITCの1年間のさまざまな活動を紹介しています。この「ITC年報」を通して、慶應義塾における一連のITC活動を皆様に共有していただき、今後のITC活動に向けて、欠けている点やさらに工夫すべき点などについて、皆様の忌憚のないご意見をお寄せください。今後、義塾の情報環境を構築してゆく際、その一助とさせていただきたいと考えております。

創設10年目を迎え、新たな飛躍を



■ ITC所長 中村 洋

慶應義塾インフォメーションテクノロジーセンター（略称ITC）は、情報技術の活用のさらなる充実と強化を図ることを目的に、1999年に創設されました。今年は10年目を迎えます。

これまで、以下のキーワードに基づき、情報基盤に関連する研究、開発、調査および試験、情報基盤の整備、運用管理および運用規定の整備、教育・研究・経営に関するシステムの開発、運用および維持などを行ってきました。

- ・ ネットワーク環境：「より高速に、より広範囲に、より安定的に」
- ・ 情報サービス：「より簡単に、より柔軟に、より便利に、より広範囲に、より安全に」
- ・ 事務・経営管理：「より効率的に、より安全に、より合理的に」

2009年度は、特に以下の5つの柱について重点的に活動を行なっております。

1、ITCシステムの統合化

在学中にキャンパスを越えて授業を履修するケースが増えてきました。そこで、キャンパスの独自性を維持しつつ、キャンパスの垣根を越えて共通に利用できるネットワーク・情報環境を整備していきます。

2、150年記念事業における情報環境整備

慶應義塾は2008年に創立150年を迎えました。150年記念事業で新築された建物におけるネットワーク・情報環境の整備を進めていきます。

3、セキュリティとコンプライアンスの向上

大学のネットワーク・情報環境は脅威に日々さらされています。そこで、セキュリティポリシーの整備を進め、ネットワーク・情報環境安全な情報環境の運用を可能にすることが急務になっています。

また、市販されたソフトウェアが大学内で適正に使用されないと、大学は巨額の訴訟リスクを負うこととなります。そのため、適正使用のためのソフトウェア資産管理体制の構

築を通じたコンプライアンス対策の推進も不可欠です。

4、 事務部門システムの効率的開発

慶應義塾内の各部門がバラバラにシステムの開発を進めていくと重複したり、非効率になったりします。そこで、ITCの主導あるいは調整により、事務部門のシステム開発を統合することで全体的な効率化の推進を図ります。

5、 一貫教育校の情報環境向上

これまで一貫教育校におけるネットワーク・情報環境の整備は、大学における環境に比べて遅れていました。現在の状況を把握するとともに、各校の状況に応じ、整備を支援していきます。

これらの重点項目に対し、ITC教職員・スタッフ一丸となって努力する所存ですので、皆様のご協力とご支援をよろしく申し上げます。